
 ◀ 書 評 ▶

白壁 彦夫・他著 “Atlas of X-Ray Diagnosis of
Early Gastric Cancer”

東医大教授 芦 沢 真 六

頁を開けば自然にひきつけられるものがある。10年以上に及ぶ努力の結晶だからだろう。そしてその成果を少しでも吸収したくなり、一番身近において何時も開いてみることになる。

内容は著者等が集めた多数の早期癌についての主としてレ線を中心としたまとめであるが、同時に良性のすべての浅い病変、小さな病変の診断学に通ずるものである。

先ず各型の早期癌について大きさ、型別に、どのような病変が容易に発見されるか、発見しにくいものの場所、型、大きさはどのようなものであり、それを見付けるためのこつ、注意等が要領よくまとめられ、今日では誰でもが知っている二重造影法のすぐれたこと。透視で見付け

ようとばかりせずいろいろの方法で写したフィルムの一寸した異常もよみとること、レ線診断学を更に微細なものへと向上させるためにも内視鏡との協力が今後にも必要のこと等がわかる。

掲載された早期癌 44, 類似良性病変 16, の各症例については、レ線像、内視鏡像、組織標本等の見事な図を主とし、説明は必要且つ充分の最少限にとめてある。それが英語で書かれていることはすぐれた日本の胃のレ線診断学を世界に認めさせるには必要のことであり、われわれも少なくともこの位の英語は今後自分のものとしておくべきであろう。

むしろ沢山の図が無限の説明をしており、心ある人ならばじっと眺め

ていると長年研究室で苦しみ努力していた著者等の姿が目に見え浮ぶことと思う。

私等がほぼ 15 年前初めて胃カメラを手に入れ、その後何度か行き詰まりそうになった時、だめなものなら自分たちでその結論を出そうと夢中になって頑張った頃を思い出す。

著者等には丁度長年手塩にかけて育てた娘を世に出した時の気持ちだろう。

このような娘ならば誰でもが無理しても嫁にもraitakくなる事と思う。

A4 判, 頁 252,

図・写真 567, 原色図 74,

1966 年 ¥ 10,000 円 200

 医学書院 刊
